



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本書紀古訓の形容詞語彙に関する研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	劉, 琳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12077号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61604
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Liu_Lin_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（文学） 氏名 劉 琳

審査委員 主査 教授 池田 証壽
 副査 教授 加藤 重広
 副査 准教授 金沢 英之

学位論文題名

日本書紀古訓の形容詞語彙に関する研究

『日本書紀』は、720年（養老4年）に、舎人親王らによって編纂され、神代から持統天皇までの歴史を記述した編年体史書であり、六国史の第一として古くから尊重されてきた。

『日本書紀』完成の翌年には宮中で講義が行われた。これを「書紀講筵」というが、その講義の内容は、『日本紀私記』や『日本書紀』古写本の訓点（書紀古訓）として伝えられた。書紀古訓は、神田喜一郎氏による訓詁学の研究、築島裕氏・石塚晴通氏らによる漢文訓読史の研究、阪倉篤義氏による語構成の研究などに見るべき成果があったが、諸本の多さから書紀古訓の調査分析に多大の時間を要することもあり、限られた研究者が論じるのにとどまっていた。

伝存する『日本書紀』の古写本・版本のうち、訓点を有する諸本は、古写本系統、卜部家系統、近世版本の3系統に分類される。近時、主要な古写本の複製本と総索引が刊行され、研究環境が整ってきたところであって、書紀古訓に反映した日本語とその内容について詳細な研究が可能な段階となった。

本論文は、このような研究環境の変化を踏まえ、形容詞語彙に着目して、書紀古訓の特質を明らかにしようとした研究である。

本論文は、漢文訓読史研究、語彙史研究、漢字・漢語の訓詁研究の三つの観点から、その到達点と今後の課題を評価することができる。

漢文訓読史研究は、漢文原文の解釈を片仮名の傍訓とヲコト点・声点・返点等の符号により示した訓点本に基づき、文字・表記、仮名遣、音韻（和語・漢字音）、語彙、文体の研究が進められてきた。対象となる訓点本は主として平安時代から室町時代までの漢籍・仏典・国書であり、その年代性と学派による訓読の相違が明らかになってきた。書紀古訓は、原文をすべて和語で読み下しており、他の訓点本に比較して特異な性格を有している。漢籍と仏典の訓点本では、一般に附訓がまばらであり、確実な形容詞の用例について論じることしかできないが、書紀古訓は、全文の訓読がほぼ復元できるものであり、訓点本の形容詞語彙の分析に最適の資料である。同文比較の方法により、書紀古訓の形容詞には上代形容詞の残存は見られるが、それ以降の時代の新要素も含んでいること、特に岩崎本④平安中期点・⑤院政期点・図書寮本院政期点と岩崎本③室町期点・兼右本・寛文九年版本とでは後者に新しい要素が見られることを証明している。

日本語の語彙史研究は、古くは阪倉篤義氏が書紀古訓を材料に語構成研究を行ったが、依

拠資料が寛文九年版本である点に問題があった。本論文は、岩崎本・前田本・図書寮本等の年代性のはっきりした書紀古訓を材料とし、可能な限り客観的な方法によって、書紀古訓の形容詞の語数・活用比率・階層構造・語の新旧、意味分野と意味的特徴を明らかにした。特に村田菜穂子氏が上代から中古の資料に示した結果と比較して、活用形の構成（ク活用かシク活用か）から、岩崎本④平安中期点は中古訓点資料に、岩崎本⑥院政期点・同⑩室町期点・前田本院政期点・図書寮本院政期点は、中古散文の形容詞に近い性質を持つことなどを指摘している。

漢字・漢語の訓詁研究は、漢字二字と対応する形容詞について、合符のある用例を中心に検討し、加点者の漢字・漢語の理解が訓読の仕方に反映していることを示した点は成果と言える。石塚晴通氏によって指摘された岩崎本の漢字二字に加えられた合符には、合符の位置によって古訓が和語一語であるか二語であるかが判断できるとした見解があったが、漢字二字の語法構造の観点から再検討したものと位置付けられよう。

本論文は、先行研究をよく消化して未解決の問題点を見出し、それらについて数多くの諸本から書紀古訓を収集・整理して実証的に論じた内容であると評価できる。『日本書紀』および書紀古訓の研究は長い歴史があり、全体として大きな主張をするに至っていない点があるが、総じて訓点本の研究には着実な研究の積み重ねが求められるものであり、かならずしも欠点とは言えない。ただし、日本語形容詞の研究にどのような貢献をなしうるか、村田菜穂子氏と田島毓堂氏の研究方法に依拠する部分が多く独自の観点が少ないのではないか、第6章の個別論が論文全体の中でどのような位置付けとなるのか、といった点は審査を通して指摘された問題点である。これらは、申請者本人も十分に理解しており、今後の研究の進展によって解決が可能な問題と言えよう。

本論文の成果は、日本語教育国際研究大会、中日対照言語学シンポジウム、語彙研究会特別大会、日本歴史言語学会等での口頭発表を踏まえた内容であり、一部は査読付きの研究論文（『日本語言語文化研究』5）として公刊されているものである。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるのにふさわしいものであると判断した。